

会員の皆様へ

今年のふらんす plus では、矢代秋雄の作品を弾きました。「ソナタ」をいつ弾こうか、矢代夫人のためにも早く弾いてあげたい、とずっと考えていましたが、今年は没後 30 年で、プログラムの組み合わせの関係でもちょうど良い機会がめぐってきて、やっと念願がかないました。

他の人の演奏で聴くと、響きはやせて聞こえ、曲の壮大きさがわからず、ピアニスティックな点で曲の書き方に欠点があるのか、と書いておりましたが、どうしてどうして、自分で弾いてみると、ピアノという楽器が効果的に良く鳴るように書かれているではありませんか。

それにしても、矢代秋雄の師事したメシアンが使うような、半音のぶつかり合った不協和な密集和音の連なりが、何と、メシアンと違って響くことか！ メシアンでは耳障りな汚い音の羅列にしか聞こえないのですが、矢代の「ソナタ」では、なぜか、美しく響くのです。これは、作曲家の響きに対する耳の鋭敏さの違いであるのか？ 私にはよくわかりません。

この曲は、非常に弾き甲斐があり、音楽的にも、ピアニスティックな面でも、弾き手に十分な満足感を与えてくれ、思う存分弾くことができました。お聴き下さった方も、この曲の素晴らしさ、偉大さを改めて認識なさったことでしょう。

矢代作品を入れた、ライブ録音のCDが、近い将来リリースされるようです。詳細は未定ですが、どうぞ楽しみにお待ち下さい。

今回の日本公演は、どのコンサートもほぼ満席になり、特に一昨年続き 2 回目となる、名古屋の平松内科クリニックのホールでのコンサートは、立ち見（立ち聴き？）も出る盛況となりました。大ホールとはまた違う、聴衆との密着、親密な一体感是他では得られないものです。以前にも書きましたが、いろいろ御苦勞がおありの中で、長く続けてこられたことは大変立派なことと思います。これからもずっと、良い企画を続けていただきたいと思います。

今号の「ロンドン便り」には、ただいまご紹介した矢代秋雄夫人の矢代若葉さんと平松内科クリニックの平松幸治さんが寄稿して下さい本当に嬉しく思います。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

今回、私はひとりで帰国しましたが、日本滞在中は皆様からお気遣いいただき、また励まされ元気づけられました。本当に、どうもありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

どうぞ皆様よいお年をお迎え下さい。

2006 年 12 月 ロンドンにて
岡田 博美